

日汉对照
全译本

こころ 心

[日] 夏目漱石 著 林少华 注译



中国宇航出版社

日汉对照
全译本

こころ 心

[日] 夏目漱石 著 林少华 注译



中国宇航出版社

· 北京 ·

版权所有 侵权必究

图书在版编目(CIP)数据

心：日汉对照全译本：日汉对照 / (日) 夏目漱石
著；林少华注译. — 北京：中国宇航出版社，2013.6
(世界文学经典珍藏馆)
ISBN 978-7-5159-0438-2

I. ①心… II. ①夏… ②林… III. ①日语—汉语—
对照读物②长篇小说—日本—现代 IV. ①H369.4:I

中国版本图书馆CIP数据核字(2013)第128388号

策划编辑 于 慧 封面设计 文道思
责任编辑 刘 莹 刘东雪 责任校对 满新茹 郭晓晓

出 版 中国宇航出版社

社 址 北京市阜成路8号 邮 编 100830
(010)68768548

网 址 www.caphbook.com

经 销 新华书店

发行部 (010)68371900 (010)88530478(传真)
(010)68768541 (010)68767294(传真)

零售店 读者服务部 北京宇航文苑
(010)68371105 (010)62529336

承 印 北京中科印刷有限公司

版 次 2013年6月第1版 2013年6月第1次印刷

规 格 880×1230 开 本 1/32

印 张 17.5 字 数 420千字

书 号 ISBN 978-7-5159-0438-2

定 价 36.80元

本书如有印装质量问题，可与发行部联系调换

夏目漱石和他的作品

(译序)

林少华

除了对职业教师，日本人一般不以“先生”称呼别人，对文学家也是这样。但对夏目漱石是个例外，习惯上称为“漱石先生”，大约同我们中国人习惯上称鲁迅为“鲁迅先生”相若。较之客气，这里边显然含有尊之为师的敬意。实际上，夏目漱石在日本人心目中的地位也同鲁迅在中国人心目中的地位差不多。但鲁迅研究，无论在中国还是在日本都属于显学。不仅《鲁迅全集》被一篇不少地译成了日文，《故乡》还被收入了日本中学“国语”(语文)教科书——不知道鲁迅先生的日本人估计占不到多数。但相比之下，夏目漱石在中国就没有那么幸运了(当然个中原因多多，很难单纯比较)。人们或许知晓川端康成和大江健三郎，但知道漱石的，除了大学中文、外文系师生和文学爱好者，恐怕不会有多少人。

然而毫无疑问，漱石是日本近代文学史上一座卓然特立的高峰。他活跃的二十世纪初期(明治与大正之交)，日本文坛可谓群星灿烂。就小说家来说就有森鸥外、岛崎藤村(亦是诗人)、田山花袋、正宗白鸟、永井荷风等人。但作品至今仍为人津津乐道的，说得夸张些，恐怕唯漱石一人而已。难怪被日本人称为

“国民大作家”，其头像赫然印在日本千元纸钞的正面，人们几乎无日不同这位大作家“打交道”。

夏目漱石，原名夏目金之助，一八六七年（庆应三年）生于江户（现东京）一小吏家庭，十四岁入二松学舍系统学习“汉籍”（中国古籍），浸润了东方美学观念和儒家伦理思想，奠定了日后文学观和人生观的基础。写“汉诗”（汉语古诗）是其终生爱好和精神寄托。“漱石”之名，即出自《晋书·孙楚传》中“漱石枕流”之句。二十一岁就读于第一高级中学本科，二十三岁入东京帝国大学（现东京大学）英文专业学习。其间因痛感东西方文学观的巨大差异而陷入极度的精神苦闷之中。一八九五年赴爱媛县松山中学任教，为日后《哥儿》的创作积累了素材。翌年转赴熊本县任高级中学讲师。一八九九年赴英国留学三年，学习英国文学和教学法。回国后先后在东京第一高级中学和东京帝大讲授英文，同时开始文学创作，发表了长篇小说《我是猫》，并一举成名。一九〇七年进入朝日新闻社任小说专栏作家，为《朝日新闻》写连载小说，一直笔耕不辍，直至一九一六年（大正五年）因胃溃疡去世。是年仅四十九岁。

漱石从事文学创作的时间并不很长，从三十八岁发表《我是猫》到四十九岁去世，也就是十年多一点时间，却给世人留下了大量有价值的作品。他步入文坛之时，自然主义文学已开始在日本流行，很快发展成为文坛主流。不过日本的自然主义不完全同于以法国作家左拉为代表的欧洲自然主义，缺乏波澜壮阔的社会场景，缺乏直面现实的凌厉气势，缺乏粗犷道劲的如椽文笔，而大多囿于个人生活及其周边环境的狭小天地，乐此不疲地直接暴露其中阴暗丑恶的部位和不无龌龊的个人心理，开后来风靡文坛

(直至今日)的“私小说”“心境小说”的先河。具有东西方高度文化素养的漱石从一开始便同自然主义文学背道而驰,而以更广阔的视野、更超拔的高度、更有责任感而又游刃有余的态度对待世界和人生,同森鸥外一并被称为既反自然主义又有别于“耽美派”和“白桦派”的“高踏派”“余裕派”,是日本近代文学真正的确立者和一代文学翘楚。随着漱石一九一六年去世及其《明暗》的中途绝笔,日本近代文学也就落下了帷幕。

以行文风格和主要思想倾向划线,作品可分为明快、“外向”型和沉郁、“内向”型两类。前者集中于创作初期,以《我是猫》(1905)、《哥儿》(1906)为代表,旁及《草枕》(1906)和《虞美人草》(1907)。在这类作品中,作者主要从理性和伦理的角度对现代文明提出质疑和批评。犀利的笔锋直触“文明”的种种弊端和人世的般般丑恶。语言如风行水上,流畅明快;幽默如万泉自涌,酣畅淋漓;妙语随机生发,警句触目皆是,颇有嬉笑怒骂皆成文章之势。后者则分布于创作中期和后期,主要作品有《三四郎》《其后》《门》(前期三部曲)和《彼岸过迄》《行人》《心》(后期三部曲),以及绝笔之作《明暗》。在这类作品中,作者收回伸向社会的笔锋,转而指向人的内心,发掘近代人内心世界的不安、烦恼和苦闷,尤其注重剖析近代知识分子的“自我”、无奈与孤独,竭力寻觅超越“自我”、自私而委身于“天”的自在和谐之境(“则天去私”),表现出一个作家应有的社会责任感和执著、严肃的人生态度。

这里,从两类作品中各选一部代表作。《哥儿》通过一个不谙世故、坦率正直的鲁莽哥儿踏入社会后同周围俗物展开的种种戏剧性冲突,辛辣而巧妙地讽刺了社会上的丑恶现象,鞭挞了卑

鄙、权术和虚伪，赞美了正义、直率和纯真。行文流畅，节奏明快，形象鲜明。通篇如坂上走丸，一气流注，而寓庄于谐，妙趣横生，至今仍是脍炙人口的作品，实为日本近代文学作品中不可多得的佳作。《心》则多少带有现今所说的推理色彩。“我”认识了一位“先生”，后来接得“先生”一封长信（其时“先生”已不在人世），信中讲述了“先生”在大学时代同朋友K一同爱上房东漂亮的独生女儿。“先生”设计使K自杀，自己如愿以偿。但婚后时常遭受良心和道义的谴责，最后也自杀而死。小说以徐缓沉静而又撼人心魄的笔致，描写了爱情与友情的碰撞、利己之心与道义之心的冲突，凸现了日本近代知识分子矛盾、怅惘、无助、无奈的精神世界，同时提出了一个严肃的人生课题。这部长篇可以说是漱石最为引人入胜的作品，至今仍跻身于日本中学生最喜欢读的十部作品之列。说得极端一点，假如没有《哥儿》和《心》，漱石能否“活”到今天还真是个疑问。

日本小说家中，较之诺贝尔文学奖获得者川端康成和大江健三郎，我更喜欢另外两个人：一个就是夏目漱石，一个是当代的村上春树。差不多二十年前在北国读研究生的时候，漱石全集便读了一集又一集；而村上的小说，近年来则译了一本又一本。粗想之下，两人之间虽时隔八十余年，但确有若干共同点。一是态度的认真与坦诚。两人都认真对待人生和社会，不伪善，不矫情，不故弄玄虚，不掩饰自己。二是笔调的幽默和机警。一些作品都富于理性的、机智的、有教养的幽默感。外国有人称村上春树为“当代的夏目漱石”，想必主要着眼于这一点。三是描写对象大多都是都市里的小人物尤其是知识分子，都以传达其孤独、

无奈、充满失落感的心态见长，而且两人同样是游离于文坛主流而独树一帜、别开生面的作家。

正因为喜欢，多年来一直想将适合日语专业大学生课外阅读的《哥儿》和《心》这两篇以日汉对译形式另行付梓。而今承蒙中国宇航出版社好意，终于得遂夙愿。人生快事，教师之乐，莫过于此。

关于注释，主要根据本科三四年级的学力就词汇和语法之偏难者附以底注。释义参考了角川书店昭和49年版“日本近代文学大系”之《夏目漱石集》中的注释和有关辞书，亦多少有我的理解。包括译文在内，未必精当，谨资参考，欢迎指正。

最后我想说的是，此书二〇〇八年出了平装本，转眼五年过去。今天您手中的精装本无论译注内容还是版式设计都较平装本有了明显改进。尤其译注方面，责任编辑刘东雪的一丝不苟使之避免了不少疏漏或欠妥之处，在此谨致诚挚的谢意。如果说一本书是一只小船，那么出版社就是一座码头。现在，小船终于离开码头扬帆起航了。但愿这只小船带给您一丝惊喜、一分收获。

2013年3月25日于窥海斋

时青岛垂柳初绿迎春花开



目
录

上	先生と私……………	1
中	両親と私……………	117
下	先生と遺書……………	175
上	先生与我……………	353
中	双亲与我……………	423
下	先生与遗书……………	459



上 先生と私



P 355

わたくし
私はその人を常に先生と呼んでいた。だからここでもただ先生と書くだけで本名は打ち明けない。これは世間を^{はば}憚る遠慮というよりも、その方が私にとって自然だからである。私はその人の^{きおく}記憶を呼び起すごと^①に、すぐ「先生」といいたくなる。筆を執^とっても心持は同じ事である。よそよそしい^②頭文字^③どはとても使う気にならない。

私が先生と知り合いになったのは鎌倉である。その時私はまだ若々しい書生であつた。暑中休暇を利用して海水浴に行った友達からぜひ来いという^{はがき}端書を受け取ったので、私は多少の金を工面^④して、出掛ける事にした。私は金の工面に^に二、三日^{さんち}を費やした。ところが私が鎌倉に着いて三日と経たないうちに、私を呼び寄せた友達は、急に国元から^{でんぼう}帰れという電報を受け取った。電報には母が病気だからと断ってあつたけれども友達はそれを信じなかった。友達は

① ごと：（接尾）接于名词和动体连体形之后。每，每当，每次，每回。

② よそよそしい：生分的，见外的，有隔阂的，疏远的，冷淡的。

③ 頭文字：第一个字母，第一个字。

④ 工面：设法安排、筹措（钱款等），经济状况，手头是否宽裕。

かねてから国元にいる親たちに勧めない結婚を強いられていた。彼は現代の習慣からいうと結婚するにはあまり年が若過ぎた。それに肝心^{かんじん}①の当人が気に入らなかった。それで夏休みに当然帰るべきところを、わざと避けて東京の近くで遊んでいたのである。彼は電報を私に見せてどうしようと相談をした。私にはどうしていいか分らなかった。けれども実際彼の母が病気であるとすれば彼は固^{もと}より帰るべきはずであった。それで彼はとうとう帰る事になった。せっかく来た私は一人取り残された。

学校の授業が始まるにはまだ大分^{だいぶん}日数があるので鎌倉におってもよし、帰ってもよいという境遇にいた私は、当分元の宿^とに留まる覚悟をした。友達是中国のある資産家の息子で金に不自由のない男であったけれども、学校が学校なのと年が年なので、生活の程度は私とそう変りもしなかった。したがって一人ぼっちになった私は別に^{かつこう}恰好な宿を探す面倒ももたなかったのである。

宿は鎌倉でも辺鄙な方角にあった。玉突きだのアイスクリームだのというハイカラなものには長い^{なわて}暇を一つ越さなければ手が届かなかった。車で行っても二十銭は取られた。けれども個人の別荘はそこここにくつでも建てられていた。それに海へはごく近いので海水浴をやるには至^{しごく}極^②

① 肝心：极重要的，关键的，宝贝性质的。

② 至極：（副）极，极其，最，最为。

便利な地位を占めていた。

私は毎日海へはいりに出掛けた。古い^{くす}燻ぶり返った^{わらぶき}藁葺の^{あいだ}間を通り抜けて^{いそ}磯へ下りると、この^{へん}辺にこれほどの都会人種が住んでいるかと思うほど、避暑に來た男や女で砂の上が動いていた。ある時は海の中が^{せんとう}銭湯のように黒い頭でごちゃごちゃしている事もあった。その中に知った人を一人ももたない私も、こういう賑やかな景色の中に^{つつ}裏まれて、砂の上に^ね寝そべってみたり、^{ひざがしら}膝頭を波に打たしてそこいらを^は跳ね^{まわ}廻るのは愉快であつた。

私は実に先生をこの^{ざつとう}雑沓の^{あいだ}間に見付け出したのである。その時海岸には^{かけぢや}掛茶屋が二軒あつた。私はふとした^{はずみ}機会から^①その一軒の方に行き^な慣れていた。長谷^は辺に大きな別荘を構えている人と違って、各自に^{めいめい}専有の^{きがえば}着換場を^{こしら}拵えていないここいらの避暑客には、ぜひともこうした共同着換所と^{ふう}いった風なものが必要なのであつた。彼らはここで茶を飲み、ここで休息する^{ほか}外に、ここで^{かいすいぎ}海水着を洗濯させたり、ここで^{しお}鹹は^{からだ}ゆい身体を清めたり、ここへ帽子や傘を預けたりするのである。海水着を持たない私にも持物を盗まれる恐れはあつたので、私は海へはいるたびにその茶屋へ一切を^ぬ脱ぎ^す棄てる事にしていた。

① から：（接助）此处表示原因。出于，基于，由于。

私^{わたくし}がその掛茶屋で先生を見た時は、先生がちょうど着物を脱いでこれから海へ入ろうとするところ^①であった。私はその時反対に濡^ぬれた身体^{からだ}を風に吹かして^②水から上がって来た。二人の間^{あいだ}には目を遮^{さへぎ}る幾多の黒い頭が動いていた。特別の事情のない限り^③、私はついに先生を見逃^{みのが}したかも知れなかった。それほど浜辺が混雑し、それほど私の頭^{ぼう}が放^{はな}漫^{まん}であったにもかかわらず、私がすぐ先生を見付け出したのは、先生が一人の西洋人を伴^つれていたからである。

その西洋人の優れて白い皮膚^{ひふ}の色が、掛茶屋へ入るや否^{いな}や、すぐ私の注意^ひを惹いた。純粹の日本の浴衣^{ゆかた}を着ていた彼は、それを床^{しょうぎ}几^ぎの上にすぼりと放^{ほう}り出したまま、腕組みをして海の方を向いて立っていた。彼は我々の穿^はく猿股^{さるまた}一つの外^{ほか}何物も肌に着けていなかった。私にはそれが第一^ふ不思議^{ふしぎ}だった。私はその二日前に由井^{ゆい}が浜^{はま}まで行って、砂の

① ところ：～しようとするところ，就要，正要，将要，即将。

② 吹かして：未然形＋す，同未然形＋せる・させる，表示使役。让，使，叫。

③ 限り：～しない限り，只要，除非。

上にしゃがみながら、長い間西洋人の海へ入る様子を眺めていた。私の尻^{しり}をおろした所は少し小高い丘の上で、そのすぐ傍^{わき}がホテルの裏口になっていたのも、私の凝^{じつ}としていた間に、大分多くの男が塩を浴びに出て来たが、いずれも胴と腕^{もも}と股は出していなかった。女は殊更肉を隠しがちであつた。大抵は頭^{ゴムせい}に護謨製の頭巾^{ずきん}を被^{かぶ}って、海老茶^{えびちや}や紺^{こん}や藍^{あい}の色を波間に浮かしていた。そういう有様^{もくげき}を目撃したばかりの私の眼^めには、猿股一つで済まして皆^{みんな}なの前に立っているこの西洋人がいかにも珍しく見えた。

彼はやがて自分の傍^{わき}を顧みて、そこにこごんでいる日本人に、一言二言何かいった。その日本人は砂の上に落ちた手拭^{てぬぐい}を拾い上げているところ^①であつたが、それを取り上げるや否や、すぐ頭を包んで、海の方へ歩き出した。その人がすなわち先生であつた。

私は単^{こうきしん}に好奇心のために、並んで浜辺を下りて行く二人の後姿^{うしろすがた}を見守っていた。すると彼らは真直^{まっすぐ}に波の中に足を踏み込んだ。そうして遠浅^{とおあさ}の磯^{いそ}近くにわいわい騒いでいる多人^{たにん}数の間^すを通り抜けて、比較的広々した所へ来ると、二人とも泳ぎ出した。彼らの頭が小さく見えるまで沖の方へ向いて行つた。それから引き返してまた一直線^{いっちょくせん}に浜辺まで戻つて来た。掛茶屋へ帰ると、井戸の水も浴びずに、すぐ身体^{からだ}を

① ところ：～しているところ、正、正在。

拭^ふいて着物を着て、さっさとどこへか行ってしまった。

彼らの出て行った後^{あと}、私はやはり元の床几^{しょうぎ}に腰をおろして烟草^{タバコ}を吹かしていた。その時私はぽかんとしながら先生の事を考えた。どうもどこかで見た事のある顔のように思われていなかった^①。しかしどうしてもいつどこで会った人か想い出せずにしまった。

その時の私は屈托^{くつたく}^②がないというよりむしろ無聊^{ぶりょう}に苦しんでいた。それで翌日^{あくるひ}もまた先生に会った時刻を見計らって、わざわざ掛茶屋^{かけちや}まで出かけてみた。すると西洋人は来ないで先生一人麦藁帽^{むぎわらぼう}を被^かってやって来た。先生は眼鏡をとって台の上に置いて、すぐ手拭^{てぬぐい}で頭を包んで、すたすた浜を下りて行った。先生が昨日のように騒がしい浴客の中を通り抜けて、一人で泳ぎ出した時、私は急にその後^{あと}が追い掛けなくなった。私は浅い水を頭の上まで跳^{はね}かして相当の深さの所まで来て、そこから先生を目標^{めじるし}に拔手^{ぬきで}を切った。すると先生は昨日と違って、一種の弧線^{こせん}を描^{えが}いて、妙な方向から岸の方へ帰り始めた。それで私の目的はついに達せられなかった。私が陸^{おか}へ上がって雫^{しずく}の垂れる手を振りながら掛茶屋に入ると、先生はもうちゃんと着物を着て入れ違いに外へ出て行った。

① てならなかった：（连语）～て・で・してならない，……得不得了，……受不了，非常。

② 屈托：忧虑，担心，烦恼，厌倦。